

「第23回総合リハビリテーション賞」授賞式が2015年9月29日、医学書院本社にて行われた。

本賞は『総合リハビリテーション』編集顧問の上田敏氏が東京大学を退官される折（1993年）に金原財団へご寄付いただいた基金を原資として発足した。

本年の受賞論文は、田中創（名古屋市総合リハビリテーションセンター）、他による「高次脳機能障害者の自動車運転における行動特徴と機能特性」（総合リハ：42巻5号、2014）である。上田敏先生より、賞状・盾・賞金（10万円）が受賞者を代表して田中先生に贈呈された。

「総合リハビリテーション賞は」1年間に掲載された全投稿論文の中から最も優れた1篇に贈られる賞で、2014年は全36篇の中から、編集同人の推薦を経て、編集委員会による厳正な審議によって選出された。

受賞論文は、医師より自動車運転検査の指示が出された高次脳機能障害患者23名と年齢・性別をマッチングさせた健常者23名を対象として、Trail Making Test（TMT）、棒反応時間測定、体幹・下肢運動反応検査、ドライビングシミュレーター（DS）による運動行動評価を行ったものである。高次脳機能障害者は、健常者と比較してTMTの所要時間が有意に長く、体幹・下肢運動反応の得点が有意に低く、DSでは飛び出しに対するブレーキ反応時間の遅延、空走距離の延長がみられた。結論として、高次脳機能障害者の運転適性を考えるうえでは、配分性注意と情報処理速度に焦点を当てた機能評価と、複雑な状況判断が求められる運転行動評価を組み合わせることが有用であると考察している。「高次脳機能障害者の自動車運転評価は、時代のニーズにマッチしており、結果、考察とも明解な本論文は、今後のこの分野の貴重な資料となることに間違いない」と編集委員会を代表して橋本圭司氏（国立成育医療研究センター）が講評された。

受賞の田中氏は作業療法士として臨床現場で患者さんの評価、訓練を担当しているなかで、高次脳機能障害者の自動車運転の明確な判断基準、評価の方



法が研究されていないため、この研究に取り組まれたとのこと。「今回の研究結果を、現在試行錯誤して取り組んでいる医療機関や、公安委員会、自動車教習所と連携をしている方々に役立てていただきたい。自動車教習所と連携して、実車での研究を次の目標としたい」と今後の抱負を語られた。上田氏も、高次脳機能障害の当事者家族の会の顧問として自動車運転については注目されており、「もっと症例をふやしてさまざまな問題を分析して、もう一回（リハビリテーション）賞をとってもらいたい」と激励された。

田中氏は、弊誌掲載の「上手なりリハビリテーション論文の書き方」を座右におかれて受賞論文を執筆されたとのこと。誰も論文の書き方を教えてくれないなかでこの記事が論文執筆にたいへん参考となったと語られ、論文執筆の際のバイブルとして、後輩にも勧めているとのことである。

「上手なりリハビリテーション論文の書き方は」、臨床で研究を志される読者に向けて、論文作成の注意点、ポイントをまとめたものである。医学書院のホームページ上に公開している（<http://www.igaku-shoin.co.jp/mag/toukudir/form/rihabiri2.pdf>）。論文執筆の際に一読いただきたい。